「書を読む」ことを再考する

池本　侑平（高校　地歴公民科）

読書とは、「書を読む」ことである。いきなり何を当たり前のことを、と思われるかもしれないが、こうして図書館報に一筆という形で噛ませていただける貴重な機会に、「書を読む」ことの意味を考えてみたい。

「書」とは何であろうか。「書物」、本と答えるのが大多数の意見であると思う。では、本と聞いて、どのようなものを浮かべるだろうか。紙が綴られた冊子状のものだろうか、それとも……。近年では電子媒体でも書籍が読めるようになっている。軽くかさばらない電子書籍に押され、書店や古本屋は伸びない売上にあえいでいる、という話を耳にする機会も増えたように思う。

利便性や手軽さを考えれば間違いなく電子書籍のほうが便利である。しかし個人的にはどうにも抵抗がある。これが単なる筆者の感情的なものであることは重々承知しているが、紙ゆえに「本」たりうる部分があるとするならば、それは「読んでいるという実感」ではないかと思う。

筆者自身、まったく電子媒体での読書に触れないわけではない。小説投稿サイトだって見るし、青空文庫を使用したことも何度もある。しかしこれらは、「そもそも紙媒体で出版されていない」、「紙媒体で入手することが困難」、「急ぎ読む必要に駆られた」という理由がほとんどである。自身が読みたいと思った本を電子媒体で読んだことは、思い返してみるとほぼない。必ず実物を手に取り、触れているのである。

この差はなぜ生まれたのだろうか。それこそが「読んでいるという実感」だと思う。ページをめくるときの音、少しずつ進んでいく栞の位置、そして読み終わり、本をパタンと閉じたときの「読後感」。これは紙の本でなければ味わえまい。

紙での読書の楽しみとして「その本との出会い」も要素の一つではないだろうか。電子媒体だとどうしても画面の先の小さな世界に幾多の本が閉じ込められ、「出会い」への感動が薄れてしまうように思う。書店や古本屋にふらりと立ち寄り、そのある種特異な空間の中で、タイトルでも装丁でもいい、何らかの理由で興味を惹かれた本を手に取る。その「出会い」はとても大切なものではないだろうか。

買ってすぐ読まずとも、しばらくは「積読」しておけばよい。お堅い学術本であれ軽快な小説であれ、積んであるならばいずれ糧になる。そういった気軽な見通しも、紙の本ゆえに立つものだと思う。実際、筆者の部屋には「積読」がそれなりの量ある。一冊ずつ読み進めていこうとはしているが、たまにほかの本に気持ちが向いて、もともと読んでいた本が置いていかれる。自身の反省点と思いつつも、これはこれで「積読」の醍醐味だとも思えてくる。ある一冊を読み進めるのがつらくなった時に「逃げる」ことが可能だからだろう。

ところで、筆者はなるべく興味を惹かれた本を「専門外だから…」と敬遠することはしないようにしている。読んでみて結果わからなければそれで良い、ともかく一度その世界に身を投じてみるのが大事であると思う。せっかく「興味を惹かれる」という接点を得たのに、それをやすやすと手放すのは非常にもったいない。ちなみに、この原稿を書いている段階で筆者が途中まで読んだ本を挙げると、渡辺政隆によるダーウィン『種の起源』邦訳に松原始『カラスの教科書』、読書猿『独学大全』。それから図書館で借りたアダム・テットロウ 著・駒田曜 訳『〈ダイアグラム〉の不思議』と月本昭男によるバビロニア創世叙事詩『エヌマ・エリシュ』邦訳、あと専門分野である歴史の本が複数とその他何冊か。我ながら見事なまでにジャンルも文体もバラバラである。

しかしそれこそ読書が読書たるゆえんだと思う。「書を読む」ことは、本を通じて「知識の海に漕ぎ出る」ことではないだろうか。これは小説も例外ではない。小説とは、それを支えうる知あって初めて完成する物語である。創作だから意味がないなどと、どうしていえよう。小説から始まる知の探究もあっていいし、かなり面白いと思う。まず触れて、学び、そして次の本へ。こうして自身で深めていった知識は、きっと一生ものの糧になると信じている。

さて、そんな「知識の海に漕ぎ出る」最初のステップとして実に有益な場所がある。そう、図書館である。図書館ほど「航海」の第一歩に適した場所はない。せっかくすぐ近くにあるのだから、まずはふらりと立ち寄って、ふと惹かれた本を手に取って。ぜひとも、膨大な知の海へ漕ぎ出してほしい。

『図書館でDVDもご視聴ください』

舟橋　美任（法人事務局）

先日、邦画で『渇水』という映画を観ました。生田斗真さんが主演で、生田さん扮する主人公、水道局員岩切が水道料金の支払えない家庭を回り、場合によっては水道を止める作業をするという話でした。払えない家庭にはそれぞれの事情があります。水道局の者だと名乗ると、怒鳴り散らすアパートの住人、品物がどうやっても売れなさそうな個人商店など、そして、母子家庭で、その母親が育児放棄、何日も家に帰らず、小さな姉妹が二人だけで暮らす家がありました。規則に従い水道を止めたものの、岩切にも当然、心の葛藤があります。無責任な母親、健気に助け合って生きる姉妹、その家の水道を止めてしまってもよいものなのか。実は岩切の家庭も家族関係がうまく築けず、妻と長男が実家に帰ってしまっていたのでした。姉妹たちに救いの手を差し伸べることができるのか。自分の家庭の関係を修復することができるのか。あとは皆さんが観てください。

映画の中に、岩切が奥さんのもとに行き、戻ってくるよう説得する場面があります。二人が話し合いをするシーンで、一面「ひまわり」が咲き乱れています。その中を歩きながら、岩切が奥さんを説得するのですが、そのシーンで私は昔観た『ひまわり』という映画を思い出しました。昔は映画の全盛期、私の子どもの頃には、みずほ大学の向かい側にあるセブンイレブンのあたりにも映画館があったんですよ。そして、堀田にも映画館があり、そこで私は学生時代にこの『ひまわり』というイタリア映画を観ました。私が観て初めて泣いた映画です。舞台は第二次世界大戦中のイタリア、映画の主人公、若い男女が幸せに結婚します。しかし、夫は、新婚早々、戦争でロシア戦線に送られてしまいます。極寒のロシア戦線、激しい戦闘。そして、戦争はやっと終わります。しかし、待てど暮らせど、夫は帰ってきません。戦死したという通知は来ましたが、遺骨もなく、夫は本当に亡くなってしまったのか。妻はあきらめきれませんでした。そして、意を決し、夫探しの旅にロシアに出かけます。広大なロシアの土地を何日も何日もかけ、戦場だった場所を訪れ、その近くの村々に行き、夫の写真を村人に見せ、聞いて回るのでした。くたびれ果て、でも、夫に会いたいという強い思いが彼女を突き動かすのです。ある日、列車に乗り、旅を続けていると、一面、雄大な「ひまわり」畑が現れます。そこに降り立つと、一面の「ひまわり」がどこまでも続いています。その景色は壮観です。しかし、彼女の目にはどのように映ったのでしょうか。地元の人に聞くと、実は、その「ひまわり」畑は多くの兵士が戦闘、そして、寒さで命を落とした場所なのでした。その兵士たちを偲び「ひまわり」を植えたのだそうです。最愛の夫は果たして生きているのか。しばらくして涙が止まらなくなるシーンになります。

実は、最近知ったのですが、その「ひまわり」が一面に咲く場所は、現在のウクライナにあります。ロシア戦線での戦いでは、なんと三千万人もの人が亡くなり、そのうちの二千七百万人がロシア人だったのだそうです。何で人間はそんな悲しい過去があるのに、同じ過ちを繰り返しているのでしょうか。『ひまわり』の男女も戦争で引き裂かれ、悲しい人生を送らなくてはなりませんでしたが、今もウクライナの戦争で多くの人が命を落とし、家を失っています。罪もない一般市民、女性や幼い子どもたち、そして、若い兵士たちが犠牲になっています。本当に愚かなことです。一日も早く戦争が終結し、人々に平穏な日常が戻ってくることを願うばかりです。

最近の映画に話をもどします。皆さんの学校生活に暗い影を落としていたコロナ。映画界も撮影ができず、ずっと映画関係者もわれわれ観客も寂しい思いをしていましたが、今、またどんどんといい映画が作られ始めています。私の注目は、藤井道人という監督です。『新聞記者』『ヤクザと家族』『余命10年』『ヴィレッジ』『最後まで行く』、テレビドラマで『アバランチ』などの作品があります。よかったらチェックしてみてください。

いつも本学の図書館では、池井戸潤や東野圭吾、柚木裕子、そして、本屋大賞の本もいろいろ揃えていただいて、楽しませてもらっています。蔵書数も多いですが、多くのDVDも所蔵されています。邦画六百本以上、洋画八百本以上、アニメ三百本弱、そして教育関連のものも千五百本近くあるそうです。最後に、その中から私のお勧めをご紹介します。邦画ー『おくりびと』『そして父になる』『フラガール』『護られなかった者たちへ』『余命10年』、『罪の声』。洋画ー『E.T.』『きっと、うまくいく』『クレイマー、クレイマー』『ショーシャンクの空に』『スターウォーズ』『ローマの休日』。アニメー『風の谷のナウシカ』『この世界の片隅に』『火垂るの墓』。

『ひまわり』© 1970 – COMPAGNIA CINEMATOGRAFICA CHAMPION(IT) – FILMS CONCORDIA(FR) – SURF FILM SRL, ALL RIGHTS RESERVED.

電子書籍を導入しました～大学・短大～

館内での利用風景

教職員向け説明会の様子

現在の教育現場では、オンライン授業や、デジタル教材の導入など、授業のICT化が急速に進んでいます。瀬木学園図書館も今年から、学園のICT化に合わせ電子書籍を導入しました。

まずは、大学・短大を対象に運用を開始しました。今後、高校への電子書籍の導入も検討しています。

今回契約した『Maruzen eBook Library』は、学術書に特化した電子書籍サービスです。専門書などを中心に、授業や研究に活用できる資料を閲覧することができます。閲覧する際は、瀬木学園図書館のOPAC（蔵書検システム）から電子書籍を検索し、アクセスします。

電子書籍の導入と使い方を広めるため、8月に教職員に向けての説明会を行いました。学生には9月のオリエンテーションや授業内で説明しました。説明会では、著作権について重点的に解説し、理解を図りました。

現在100冊ほど購入していますが、これからも学生や教職員からの意見も取り入れながら、利用できる電子書籍を増やしていく予定です。紙の書籍とともに、電子書籍も活用されることを願っています。

発　行：名古屋市瑞穂区春敲町2-13　瀬木学園図書館　2023年12月　NO.42　印刷：富士フイルムサービスリンク㈱